

病院とスポーツ

～医療現場の絆を紡ぐ～



医療現場では以前から「縦割り組織」の弊害が指摘されてきた。

部署間でのヨコの連携を密にし、いかに風通しを良くするか。

連載では、スポーツを通じて職員間の絆を深め、組織強化などに役立てている病院を取り上げる。

法人が活動を全面支援 職場の融和をもたらす

社会医療法人栄公会
佐野記念病院 ①
(大阪府泉佐野市)

家族や退職者、他病院の職員も歓迎 設立へのハードル低く、19チームが活動

社会医療法人栄公会佐野記念病院は整形外科、脳神経外科を中心とした急性期病棟(53床)、回復期リハビリテーション病棟(42床)のケアミックス病院。介護老人保健施設、グループホームなど介護・福祉施設も幅広く展開し、切れ目のないサービスを提供している。

特筆されるのは、グループを挙げて職員のサークル活動を奨励、支援している点だ。メンバーが4人以上そろえば申請が可能で、申請が認められれば活動補助として1人当たり年間4000円が支給(医療と福祉両部門にまたがったメンバー構成は1人当たり6000円)される。法人のOB・OGに加え、他の病院・施設職員にも門戸を開いている。

現在、スポーツ系8競技を含む19のサークルが活動。文科系サークルのなかには「和歌山ラーメンをこの上なく欲する会」「美味しいものを発掘する会」といったユニークなサークルもある。制度導入にあたって中心的役割を果たした法人本部の岸本安生主任は「職員の皆さんが楽しく交流することで働きやすい職場になり、仕事も円滑に進みます。医療や介護の質を向上させることにも役立っています」と意義を強調する。サークル活動が医療と福祉の異なる部門間の垣根を取り払い、職員融和につながっているというわけだ。

制度がスタートした当初に発足したテニスサークルには、0歳から13歳までの家族会員を含む30人あまりが所属し、月1～2回汗を流している。代表を務め、病院の向



家族とともに笑顔を見せる栄公テニスサークルのメンバー

かいの建物にある栄公ケアプランセンターの太田沙綾香さんは「病院と福祉施設は施設の建物が分かれていることもあり、接触する機会がなかなかありませんでした。サークル活動を通じて、練習の合間におしゃべりをしてどんどん交流が深まっていきます。サークル活動を通じて知り合えた方がたくさんいらっしゃいます」と目を細める。

10月で、サークル発足から1年が経過した。これまではメンバー同士でプレーを楽しんでいたが、来年には和歌山県などで開催され、優勝賞品や参加した記念に季節のフルーツが贈られるテニス大会への出場を視野に入れている。

太田さんは「このような楽しい活動をしている職場であることをアピールしたいです。栄公会グループを皆さんに知っていただく機会になれば」と意気込んでいる。

病院とスポーツ

～医療現場の絆を紡ぐ～



医療現場では以前から「縦割り組織」の弊害が指摘されてきた。

部署間でのヨコの連携を密にし、いかに風通しを良くするか。

連載では、スポーツを通じて職員間の絆を深め、組織強化などに役立てている病院を取り上げる。

「顔の見える関係」構築 ますます存在感を高める

社会医療法人栄公会
佐野記念病院 ②
(大阪府泉佐野市)

Instagramなどで活動を紹介 好感度を高め採用活動にもプラス

社会医療法人栄公会佐野記念病院のバドミントンサークルは、グループのサークル活動制度がスタートした2023年、テニスサークルに続いて発足した。

現在所属しているのは医療、福祉関係10部署の23人。同院で夜間の診察がない木曜日を選んで月1回、病院近くの体育館を借りて練習している。栄公ケアプランセンターの介護支援専門員(ケアマネジャー)でサークル代表の坂口順子さんは「活動を重ねるごとに『楽しそう』という評判が口コミで広がり、参加メンバーがどんどん増えていきました。競技経験者もいますが、私のように『これならできるバドミントン』という軽い気持ちで始めた人も多いです」と説明する。

職員の家族も参加できる制度を活用し、施設の送迎を担当する男性運転手とその家族もメンバーに名を連ねている。

「運転手さんの娘さん夫婦が赤ちゃんを練習会場に連れてくるので、みんなで『かわいいね』と言っています」(坂口さん)

毎回、アットホームな雰囲気のなかで練習し、メンバーは心身ともに癒されている。

病院とグループ内の介護事業所の職員は同じ更衣室を使用しているので話も弾むという。坂口さんは「サークル活動を通じて知り合った仲間がいると、他の部署でも気兼ねなく部屋に入れます。私も『ケアマネの部屋、入ってもいい?』と聞かれ、『どうぞ、どうぞ』と答えています。



栄公バドミントンサークルのメンバーら。職員の子どもの中高生も参加することもあり、活気にあふれている

患者さんの依頼もしやすくなりましたし、医療と福祉の間に顔の見える関係性ができたことは、仕事の面でも非常にプラスになっています」と強調する。

サークル活動には副次的な効果もある。法人本部の岸本安生主任は「私は新卒者の採用担当をしていますが、若い人は職場を選ぶ際、職場の雰囲気や人間関係を重視します。職員が和気あいあいと楽しくしている姿は好感を持たれ、イメージアップにつながります」と指摘する。サークルの活動については法人のホームページやInstagramで紹介するなど、リクルートの一環としても役立っている。

新卒で入職した若手職員がサークルに所属することによって新しい交流の輪が広がり、対外的なPRにもつながる好循環。グループ内でのサークルの存在価値が日増しに高まっている。